Kwansei Gakuin University

アムステルダムにおける初期改革派教会の形成とアルミニウス
—アルミニウス研究（序）—

木ノ脇　悦郎

オランダの教会が歩んできた歴史を考える場合、一般にそれはカルヴァン派改革教会の歴史の一部として取り扱われるか、あるいはイギリスにおけるアルミニウス主義との関係において論じられるか、またピューリタンの歴史的経過を明らかにするために論じられるのが常であり、オランダ改革派そのものを対象として論じられることは稀であるといえよう[1]。特に、これまでの研究でオランダ改革教会の性格をドルト会議（1618－19）以後に決定的となったものとそれ以前の教会の性格を同一視して理解しようとすることは正しい歴史理解からは程遠いものといわねばならず、最近の研究では時系列を経て変化していったオランダ改革教会の歴史を詳細に見ていこうとするように変わっているのである[2]。しかも、初期オランダ改革派教会の中で大きな影響を残し、後世のいわゆるアルミニウス主義の生みの親となったアルミニウス[3]について論じようとする場合、彼を育み、彼自身がその教会の牧師として働いたアムステルダムの改革教会の歴史を概観しておくことは不可欠の要件である。それはBangsも述べているように、アルミニウスの名はアルミニウス主義と同時に語られることが多いのであるが、後世の主義ほどには彼自身についてよく知られていないという実情に対する批判的な対応でもある。特に、アルミニウスをあるいはペラギウス主義あるいはツヴィングリ主義あるいはソッツィーニ主義、また教皇主義と断罪して、改革派の異端とすることでよしとするような歴史的判断に対し、1590年代の宗教的状況を提示することが彼の神学的展開についての理解をも深いものとするという指摘はわれわれも是認する所である[4]。

われわれは、ピューリタンはもとよりイギリスの教会にも影響を及ぼし、特

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

にイギリスにおいてメソヂスト運動の担い手となったジョン・ウェスレーへの影響をも考慮に入れ、アルミニウスの神学思想そのものに迫ってみたいと考えるものである。そのために、まず始めにオランダ改革派教会の形成の歴史、特にアルミニウスが牧会したアムステルダムの教会の形成とその性格を明らかにし、その中でアルミニウスがどのような位置付けを持っているのかを理解しておく必要があると思われる。その場合の位置付けとは当然のこととして、後にドルトレヒトの教会会議で異端宣告を言い渡されるようになったアルミニウスの神学思想の形成にアムステルダムの教会とそこに見られる基本的な性格とがどのような影響を与えているかということも考慮の対象となろう。

1

アムステルダムはヨーロッパにおける他の町のように古い歴史を持ってはいない。その周辺の街と比べてみてもその新しさは際立っている。つまり、ユトレヒトはローマ時代までその歴史を遡ることが出来るし[5]、すぐ近くのハーレムにしてもアムステルダムより数世紀は古いのである。その出現は、せいぜい13世紀の半ば頃Y字型のアムステル河合流点であるといわれる。しかも、それは小さな町であり、漁師とわずかにバルチック海の貿易を事とする商人の町であったに過ぎない。例えば、Israelがいくつかの古い資料からまとめた人口推移の統計によれば、1300年代にはアムステルダムの人口が1000人に過ぎないのにハーレムは倍の2000人、ユトレヒトは5500人であり、1500年代になって様子が変わり、それぞれ12000人、11500人、15000人を擁するようになり、アムステルダムの人口の著しい伸びが見られるようになる[6]。さらに、16世紀も後半になるとアムステルダムには宗教的、経済的理由から多くの人が集まるようになっていくのである。つまり、1578年には30000人にまで増えた人口は1610年には倍増し、1640年までには145000人、1660年には200000人にも達しているのである[7]。このように人口の推移一つを取ってみてもアムステルダムの新しさがわかるのである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ところで、ヨーロッパ各地に宗教改革が起った16世紀のオランダは、ネーデルランド地方全体がそうであった故に、スペインのフィリップ二世によって政治的にも宗教的にも支配を受け、圧迫の下に置かれていたといえる。ネーデルランドを支配していたのはブルゴーニュ公であったが、後に神聖ローマ帝国の皇帝カール五世がそれを継承し、現在のベネルクス三国を手中にしていたのである。1555年にカール五世が退位するにあたり、その息子スペインのフィリップ二世にその所領が譲り渡されることになった(8)。彼はカール五世と違い、ネーデルランド諸州に保証されていた政治上の自由、自治の名残に反対し、宗教的にも抑圧しようと企てたのである。彼は全国議会を開く権利を否定し、各州の知事職を貴族たちに託し（オラニエ公ウィレムはホラント、ゼーラント、ユトレヒトを任される)、異母姉であったパルマのマルガレータに全統治を任せたのである。フィリップは宗教政策についても新しい試みをし、1559年には新しい司教区を設定して、自ら司教を選任するなどして、貴族達の騒ぎを引き起こしその統治に危機を招くことになるのである。つまり、従来ランス、ケルン、トリエルという外国の大司教に属していたネーデルランドの教区を独立させ、メヘレン、カンブレ、ユトレヒトに設けた司教座に所属する18の司教区に分けたのである。その上、司教志願者は神学博士で無ければならないという措置をとり、貴族の次男以下にとって大きな障害になったと同時に、多くの富裕な僧院の収入が新しい司教区に与えられるなど従来の聖職者達自身の利益侵害にもなっていったのである。しかも、マルガレータの下に統治権を行使する側近会議を設け、さらにスペイン軍をネーデルランドに常駐させるなど彼の過酷な支配がネーデルランドにスペインの支配に対する反乱を呼び込み、後には北のホラントとゼーラントがオランダ共和国として独立し、依然スペインに従属していた南のスペイン領ネーデルランドとは縁を切ることになったのである。

ところで、16世紀初頭、ホラント州に属するアムステルダムは、当然、公的にはローマ・カトリック教会の町となっていた。16世紀に入ると、アムステルダムは経済的な発展を遂げ、ネーデルランド地方ではアントワープに次ぐ大きな町に成長したのである。16世紀に入ってからのアムステルダムの飛躍的な発

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

展については先にも述べたとおりであり、その人口動態からも容易に推測することが出来るのである。アムステルダムはカトリックの町として二つの大きな教会が存在していた。Sint Nikolaas 教会はオランダ民話のジンター・クラースを町の守護聖人とした名前に由来するものであり、最初は木造の小さな Sinterklaas-kapel であったものが後に Oudekerk（旧教会）と呼ばれるようになり、もう一つは Sint Catharina 教会あるいは Nieuwekerk（新教会）と呼ばれていた。様々な奇跡物語等とも混合しながら、カトリック信仰は一般的となっていき、特に旧教会は商人のギルドと深い関係を持ち、商人達の特別な信仰の中心となっていたのである。1520年代に宗教改革がドイツで起ると、アムステルダムはルターの思想、書物、人物を入れないように注意し始めるのである。

しかし、アムステルダムにはいつも改革の気運が満ちていたと指摘する向きもあるようである[9]。例えば、オランダ教会史を書いた R. B. Evenhuis は、14, 15 世紀には既にアムステルダムにプロテスタントの始まりがあると指摘しており、14世紀には Devotio Moderna 運動の指導者であったフローテがオランダ語の説教をしており[10]、フランシスコ会の司祭 Johannes Brugman は改革運動が起ることを予見していたというし、記録によれば、アムステルダムには少なくとも５人の改革的司祭が存在していたという。傾向としては旧教会が伝統的カトリック信仰を守る立場、新教会は新しい考えに対して開かれた姿勢を持っていたようである。また、アムステルダムではカトリック教会の公的行事におけるプロセッションに市の軍隊が制服を着て参加することになっていたが、ある者はフランシスコ会の着る茶色の衣服を着て抵抗の姿勢を示すこともあったという。

アムステルダムの市政は寡頭政治の体制をとり、同じ家系の者が指導者となるのが常であった。しかし、だからといって市の政府が宗教的に常に一体であったわけではない。その中には、カトリックのみならず反カトリックの立場をとる者もあった。しかし、教義的に明確な相違があったというわけではない。彼らは立場上、公的に反カトリックの活動をすることは出来ないので内密に活動をする「自由な心を持った者」（vrijheidsgezind）であったに過ぎない。Evenhuis

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

はこの人たちの類型を示しているという[11]。第一は異端審問を嫌う者、第二はアムステルダム市民の歴史的特権のために闘う者、第三は貿易に最大の関心を持つ者であるが、彼らは宗教的自由を含む最大限の自由こそ大事であると考える者達である。このようなアムステルダムの改革的雰囲気は、当時のヨーロッパ各地で生じつつあった宗教改革運動に触発されながら徐々に強くなっていく改革的心情とでも言うべきものであり、このような初期の改革への希求が持っている本質を厳格な教義的視点から捉えたり、あるいは後のカルヴァン主義改革派教会と同一視したのでは、改革の歴史的発展を理解することは出来ず、教条的な判断に陥ってしまう危険がある。実は、この時代のアムステルダムの政治、宗教を特色あらしめているのはこの人々である。この人達が、ドイツ、フランスのプロテスタントとの交易をすることによって外側からプロテスタントの影響が入ってきたといえよう。

当時一般的であった聖職者の堕落についても、アムステルダムだけが例外であったわけではなく、司祭の畜妾、聖職禄をめぐる経済的不公平、教区司祭の数の少なさに比較して司牧を担当しない司祭の異常な多さと彼らの怠惰等、忠実なカトリック教徒からもその悪習については不平が漏らされているような状態であった。

2

アムステルダムにおける宗教改革の機運は、15世紀以来アムステルダムと強力な関係を持つようになっていたハンブルクとの交易に力のあったPauw家及びバルチック海、フランス、ポルトガル、地中海にまで貿易路を広げていた新興商人達の間から生まれる。この商人達は聖書の翻訳、ルターの文書、賛美歌などを持ち込み、それが印刷に付されると同時にスイスからツヴィングリの影響も入り始めるのである。しかし、改革運動が組織的にアムステルダムにもたらされたというのではない。これもまた、一つの特徴といわなければならないであろう[12]。1535年に急進的アナバプテストのミュンスターが滅亡すると、ア

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ムステルダムにその影響が現れ始める。つまり1535年２月に、服を脱いで終末の到来を叫び回る男女の「裸の行進」の後、３月には武装したアナバプテストが町を攻撃し両方に死者が出るという騒ぎが起っている。しかし、このような急進的暴力的運動に対する一般的な嫌悪感から、しばらくは改革運動が後退することになる。

ただし再洗礼派の思想を持ちつつ、より穏健な活動をして一派をなしたメノナイト派がその中から現れたことを付け加えておかねばなるまい。メノナイトの最初の指導者、Menno Simons（c. 1496－1561）は最初ルター教義の影響を受け、その後ツヴィングリ、続いてアナバプテストに傾斜していった人物である。しかし、1534－35年にはミュンスターでの暴力行為に対しては批判をしているが、この段階ではまだカトリックを離れてはいなかった。彼がカトリックと公的に決裂してその活動を始めたのは1536年である。その後、1541年から43年まではアムステルダムで働いた後、北西ドイツに渡っている。彼の教えは徹底した聖書主義であり、それは暴力の否定、イエスに従う人生の姿勢、徹底した謙遜といったものであり、政治的には完全な非政府主義の立場を採るなど、極めて実践的であり、神学的あるいは論理的というよりむしろ心情的である点ではアナバプテストの伝統を汲んでいるといえよう(13)。

先に述べたアナバプテストの暴力的行為の結果、改革的気運が下火となり、アムステルダムではカトリックの下で市政が執り行われ、改革に同調していた人達は公職から退けられるようになり、1535年から65年までの間はカトリックの支配下におかれることになったのである。

しかし、改革の機運が完全になくなったのではない。新興商人たちはバルチック海から地中海までの沿岸貿易の中で、アムステルダムでは聞けない新しい宗教思想を聞き、アムステルダム自体でもカトリックの礼拝をしながら一連の問題に対して改革の希望を持った人々が存在したのである。1540年代に入ると、改革への動きは急速に高まっていく。新興商人達が市長、裁判官、議員、財務官等市の要職を占めるようになり（これが、17世紀オランダの黄金時代をもたらす原因となるのだが）、王に対して明らかな抵抗がなされるようになるので

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ある。1566年にはこのグループが市のカトリックを中心とした政権にとって代わりプロテスタント化の始まりとなる。彼らの中から、ハイデルベルク信仰問答を学ぶ小さなグループが出来、さらには市の城壁の外で礼拝を持ったのである。Bangsはこの集まりが厳密な意味でいかなる教派、例えばアナバプテスト派、ルター派、カルヴァン派の牧師や神学者を含むものでなく、ホラント人自身のものであったと指摘する。したがって、ハイデルベルク信仰問答もそれが公的な教義の基礎ではなく有益な道具として考えられ、教義の土台は、教会のローマ的堕落に対する聖書的ヒューマニズムであったという指摘も加えている。これは、アムステルダムの教会を理解する上で非常に重要な指摘であるといえる(14)。

同じ1566年にはブリュッセルで重大事件が生じている。つまり、身分の低い貴族や群衆の間に反スペイン、反カトリックの扇動が起り、支配者代理人であったパルマのマーガレットに対し、ネーデルランドにおけるフィリップ王の異端審問を止めさせるように要求して宮廷まで行進するが、これ以後彼らは「乞食」という名称で呼ばれるようになる。代表的貴族の一人であったオラニエ公ナッサウのウィレムは、この運動のリーダーとなり、これが独立戦争へと展開していくことになるのである。この運動の中で群衆の熱狂と過激な運動がフランダースでの大々的な画像破壊運動にまで発展することになるのである。アントワープから来た商人達がアムステルダムにこのニュースを伝えて、扇動するとアムステルダムでも群衆の略奪、暴動が起るのである。商人改革者たちは群衆の行動を静めるよう説得するが、これは成功しなかった。特に、カトリックの伝統を守ってきた旧教会の略奪はあふれる群衆によって激しいものとなった。その結果、市当局は改革者に公的礼拝を持つ許可を出すことになり、改革的な説教者が必要となったので、牧師を招き恒常的に教会生活の指導者としての責任を負うことになる。執事や長老といった教会の制度も整え、教会としてはフランシスコ会修道院教会を用いるが、その他の教会は閉じられ、教会からの略奪は続くのである。しかし、ここにプロテスタントの公的礼拝が始めて行われたことの重要性は指摘しておく必要があろう(15)。それと同時に、ここでプロテ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

スタントという場合、ルター派は少数であったが、主の晩餐に関して違った理解を取っているので自分たちは別のチャペルを使用することを要求している。ところが、改革的商人達はそのような論争を二義的なものとして、プロテスタントの分派は好ましくないとの立場をとっているのである。このことはアムステルダム教会を理解するために大事なポイントとなっている。つまり、彼らが望んでいたのはツヴィングリ、カルヴァン両派のいわゆる改革派とルター派をも含む包括的教会であったということである[16]。しかし、この姿勢はルター派のみならず厳格なカルヴァン派からも拒絶される。ここで、アントワープのカルヴァン派はアムステルダム教会の教義的曖昧さを正すため Casper van der Heydenx[17]を送り込み、アムステルダムの改革派の性格を導くことになるのである。このように、アムステルダム教会は最初から教義的なカテゴリーによって規定することの困難な特殊な側面を持っていたことを理解しておくことが必要であろう[18]。

一時的に改革勢力が力を得ていくが、1567年アルヴァ侯が、改革派に対する破門勅書を持ってスペイン軍を伴い南から進撃してくると、改革を推し進めようとしていた商人達の多くはアムステルダムを逃げなければならなくなる。そのほとんどはエムデン（Emden）[19]に逃亡するが、逃亡先にさえ逮捕命令が送られたりしてその逃亡は困難を強いられることになるのである。こうしている間も、アムステルダムに残ったプロテスタントは迫害に遭い、財産没収あるいは殺害され、スペイン軍は町を略奪し、港も閉鎖され、指導者もいなくなり町はさびれていき、アムステルダムの代わりに Moorddam（殺人ダム）とさえ呼ばれるようになったのである。

エムデンに逃亡した人達は、かの地で貿易を営む傍ら、礼拝を持ち、その財力と信仰を高めていく。エムデンにはネーデルランドの他の土地からも逃亡者が集まり、移住してきた人達によって改革派の集団が形成され、多くはその中に吸収されるが、アムステルダムのグループは独自の集会を形成していた。各地から逃亡してきた人達の「散らされた者の教会」が、国家形成に先立っていわば国家的教会を形成していたという Bangs の指摘はオランダの歴史を考え

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

るに際して重要な指摘といえよう[20]。彼らは、共同してファンドを作り、牧師の給与、将来の牧師の教育に用いる決定をし、また教会秩序を作るなど亡命地で教会形成に努めていたのである。しかし、そこにも立場の相違が現れる。融通の利く人達（rekkelijken）はいわゆる自由主義者であり、広い心を持った人々であったが、それに対して南からの、特にプファルツァ公国からの亡命者達は厳格な人達（preciezen）であり、彼らは当局の一切の介入を排除して自分達だけの問題として教会秩序を形成しようと欲していた。したがって、そのメンバーは信仰告白、教義的一致によって結ばれると考えていたのである。1571年にはエムデンの教会会議が開かれ、そこで教義的一致のため「ベルギー信条」が採用されることになり、教会による政府確立の計画を立てている。しかし、それだからといって厳格な人達、特にカルヴァン主義に立つ人達が勝利したとはいえないまでも、オランダ改革教会の基本的性格を規定することになる一つのエポックであることは、後のドルト会議ほどではないにしてもその重要性を指摘しておくことは出来るであろう。ところが、アムステルダムからの亡命者達はこれに反対し、その後もこのエムデンの決定を教義的にも政治的にも受け容れてはいないのである。ここにも、アムステルダムの改革的な人々がどのような改革を求めていたかという特質の現れを見ることが可能といえる。例えば、後にアルミニウスの義父となる（妻 Lijsbet の父親）Laurens Jacobsz. Reael は、自分の子供達のためにエムデンで用いられていたものとは違う独自のカテキズムを書いており、それが亡命してきたアムステルダム商人達の一般的な宗教的感情を表しているといわれる[21]。

1572年、スペインに対抗して「海の乞食達」[22]が蜂起し、アムステルダムを支配していたアルヴァ侯は次の1573年に逃亡[23]、1574年にはスペインの包囲に対してライデンが抵抗し、解放を勝ち取っていく。こうしてアムステルダムのカトリックは孤立し、政治的にも貿易においてもその力を維持できなくなる。こうして1578年には、カトリックの聖職者は町を離れ、政府もカトリックから亡命していた商人達にとって代わられ、生き残っていた1566年の改革者達に勝利がもたらされることになったのである。この年は「アムステルダムの政変」

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

と歴史的には記憶されている。改革教会は牧師をデルフトから呼び寄せ、この年からアムステルダムでの公的礼拝を開始し、さらに長老や執事をも選出して教会の体制を整え始めるのである。その指導者の多くは、当然プロテスタントの商人達であった。

3

1578年、アムステルダムに新しく設立された市政府は、制度的には従来の寡頭政治体制を維持した。新しく選ばれた市議会のメンバーは主として三つのグループからなっていたといわれる。1566年に改革者であり、苦しい放浪を体験した「古い乞食達」が13人、穏やかな改革者グループが13人、そして改革者に共感しつつも自身は改革的な行為に参加しなかった人達及びカトリック10人という「36人議会」が形成されたのである。新しい4人の市長達も帰ってきた商人達の中から選ばれ、新しい寡頭政治が整っていくのである。アムステルダムの状況変化は商業の復興と、それに伴う人口増加をもたらすことになる。特に人口増の大部分は宗教的のみならず、経済的理由によって南から亡命してきた人々によって占められていた。この年のアムステルダムの人口は3万人に上り、1610年にはその倍にまで増加するのであるが、移住してきた人の中には厳格なカルヴァン主義者が多かったゆえに、教会にも多くの性格の変化をもたらすことになるのである。アムステルダム教会に新しい牧師が迎えられる。Johannes Cuchlinus と Petrus Hardenberg の二人であるが、Hardenberg の去った後、新しい改革教会の混沌とした状況の中で責任を負ったのは Cuchlinus（彼は、1585年から95年までアムステルダムの牧師として働く）である。彼は真面目で成熟した指導者として、形成期の混乱の中にあったアムステルダム教会をよく導いたが、教会の中心となっていた商人改革者達は教義問題にあまり関心を持つことをせず、さらに町に残っていたカトリックの人々は南からの援助を求めるような動きもあったのである。また、後にアルミニウスの敵対者となる Petrus Plancius[24]は、1585年に牧師として招かれており、その後何人もの牧師が招か

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

れることになったのである。

このように、新しい体制でアムステルダムが動き始めると同時に、ネーデルランド北部の政治情勢全体も変化していった。1579年には「ユトレヒト同盟」が結ばれ、ホラント、ゼーラント両州は宗教上の自立を得ることになる。これが、後に連邦共和国の中心となり南のスペイン領ネーデルランドと袂を分かつ原因となるのであるが、当初オラニエ公ウィレムはネーデルランドのすべての州を結集することと信仰告白の権利を認める「宗教の平和」を望み、カルヴァン派主導を認める「ユトレヒト同盟」を喜んでいなかった。しかし、オラニエ公が1584年暗殺されるに及び、全国議会は参事院の議長にその息子ナッサウのマウリッツを選んだのである。ところが、マウリッツと国際関係についての見解を異にする人々はイギリスに援助を求め、エリザベスはお気に入りのレスター伯爵に軍隊をつけて北部に送り込むのである。レスター伯爵はユトレヒトに本部を置き、極端なカルヴィニストに親しみを示し始めるのである。彼の支配の下で開かれたハーグの教会会議は、牧師招聘に関して当局の一切の関与を排除するというカルヴァン主義的な決定をなし、ジュネーヴ教会の政治制を採用することになったのである。このように、カルヴァン主義が大きな力を持ち始めるのであるが、しかしオランダの教会がそれによって内面的にも一致していたということを意味してはいない。つまり、各州が実権を持ちつつ緩やかな連合組織を作りたいと願っていた自由主義者も多くあり、レスターの強引な施策はかえって彼自身の失脚を早めることになったのである。1588年レスター伯爵の後を受けてマウリッツが総督に就任すると、彼は持ち前の軍事的才能を発揮して次々と北部諸州で勝利を収め、北部の七つの州からなる連邦共和国を作り上げたのである。この間に、周辺世界の勢力にも変化が現れる。マウリッツが総督に就任した1588年にはスペインの無敵艦隊が敗北を喫して力を失う。マウリッツはフランスのアンリ四世とイギリスのエリザベスに対スペインの同盟を結ばせると共に連邦共和国を承認させ、1609年に至ってスペインにも連邦共和国を独立国と認めさせることに成功するのである。

こうして連合を形成していった北部七州は教会政治的にはエラストゥス主

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

義[25]を取りいれるが、教会問題について当局の役割をどのように見るかという議論は、先に触れた融通の聞く人達（rekkelijken）と厳格な人達（preciezen）の二極分化を教会にもたらすことになったのである。このように、教会と国家の問題については周辺の政治的状況がどうであれ、非常に早い段階からあったカルヴァン派と自由主義者の間に大きな溝を作っていたと言わねばならない。外面的には、お互いに一致を保ち、特にアムステルダムでは自由主義的当局者と正統カルヴァン派の聖職者の間にも外見上の一致は保たれていたというべきであろう[26]。

ここで、アムステルダム教会と市当局との関係について見ておくことは有益であろう。先に述べたように1578年にいわゆるアムステルダムの政変が起った後、教会会議の組織化に続いて市政府の組織化が行われたのである。市の組織は教会よりも広い範囲にわたっているが、その指導者を見ると二つの組織の指導的メンバーはほとんど同じといってよい。教会は12人の長老、12人の執事からなるが、毎年半数が入れ替わったとしても、一年経つと同じメンバーが復帰することが多かった。また、市政府には4人の市長、36人の議会議員を中心とした組織が作られるのであるが、1578年当初には市長の内3人までが教会の長老によって占められており、その一体ぶりを示している。このようにほとんど一体化した二つの組織は、あたかも一つのものであるかのようなステイタスの順序を構成することにもなっていた。つまり、執事、長老、議員、市長の順に進んでいくという人事構成が暫く続いたのである。例えば、アルミニウスが結婚した相手のReael家の人であるJohan Pietersz.Reaelの場合、1578年に執事、1581年に長老、1603年に議会議員、1604年に市長に選出されるという典型的な道を通っている[27]。当初、それぞれの構成員の多くは亡命を経験した改革者達であったといえるが、彼らの改革精神は比較的緩やかなものであり、決して教条的、執念深いものではなかったし、中にはアナバプテストの関係者も含まれていた。そして、多くは良心の自由を強く保護することを願っており、アルミニウスの強力な擁護者となると同時にオランダ改革派教会の狭い教条主義的立場に対して対抗した人達であった。しかし、時代の変化につれて市の指導者と

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

教会の指導者の間に距離が出来、88年になると長老から市長に選出される者もなくなっていったのである。それに伴い、議会のメンバーにも南から入ってきた厳格なカルヴィニストが加わるようになり、それまでのアムステルダム教会とは違った様子を示すようになっていくのである。アルミニウスが、牧会に加わるようになるのは、まさにこのような変化の最中であった。アルミニウスは、神学的にはカルヴァン主義者であり続けたのであるが伝統的に専制主義を嫌い市民的、宗教的自由への願いを持続しようとしていたアムステルダムの伝統を良しとしたのであった。このような姿勢を持ったアムステルダム当局によって学費の援助を受け、支えられ、また当局者の期待もあって迎えられたアルミニウスとしては当然というべきであろうか。したがって、Adamsが指摘するように、彼はその活動の中で教会の支配力を政治的に保持しようとするカルヴァン主義者に抵抗したといえるし、それはローマ・カトリックとスペインの暴政に対して宗教的自由を求め、迫害に苦しんだカルヴァン主義が主導権を持つようになると宗教的強制を進めていこうとする矛盾を鋭く暴いたものでもあるといえよう[28]。それゆえ、アルミニウスが牧会活動に入ると、上に述べたようなこれまでの伝統的立場に立っていた当局者達は彼の説教を好んで聞いていたということも肯けるものである。

4

アルミニウスは、1560年ユトレヒトの近くウーデウォーターに生を享けている。その父はJacob Harmenszといい、ウーデウォーターの古文書によれば広い意味で刃物製作者（messemaker)、正確には武具職人（wapensmid）であったといわれている。母はEngltije Jacosdrといい、その夫を早く亡くし、一人で三人の子供を育てたという。アルミニウスの葬儀の後、彼についての追悼演説をしたPetrus Bertiusの草稿によってその後のアルミニウスの歩みを追っていくことにしよう[29]。

彼は、幼少時にその父親を亡くした後、町の尊敬を集めていた聖職者、Teo-

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

dore　Aemilius に見出され、彼の庇護の下でラテン語、ギリシャ語、宗教教育の初歩的基礎教育を受ける。Aemilius の死後、ヘッセンからその生まれ故郷に旅行に来ていた Rudolph　Snellius に彼の教育が委託されるようになるのである。その時、彼は15歳、Snellius は数学者として有名であり、言語にも優れた才能を持っていたが、長い間スペインの暴政から逃れてネーデルランドを離れマールブルクに住まいを構えていた。彼はアルミニウスをマールブルク大学の学生として迎えるべく、ドイツに帰る時にヘッセンに伴っていったのである。1575年である。アルミニウスが新しい保護者の下で過ごしているうちに、その8月ウーデウォーターの大虐殺のニュースが伝わってくる。スペイン軍は町を包囲し、守備隊を殺害し、見つける限りの市民をも虐殺して、町を焼き払ったのである。その時に、アルミニウスの母、兄弟姉妹、親戚も皆殺しになったといい、一切の係累を失った全くの天涯孤独の環境を生きることになったのである。この出来事の最中に、ライデンに新しい大学がオラニエ公の後援の下に設立されたのである[30]。彼は、故郷にできた大学で学ぶべく準備をし、まずロッテルダムに赴くのである。なぜなら、そこにはウーデウォーターからの亡命者達がいたからであるが、同時にエムデンに亡命したグループと別のアムステルダムの亡命者達もその土地には存在したのである。ロッテルダムに到着したアルミニウスの才能に関心を示したのは Bertius の父親であり、彼は自分の家にアルミニウスを迎えた。またオラニエ公とその議会のフランス人説教者であった John　Taffinus も彼に関心を示した。こうして、彼らはアルミニウスをライデン大学に入学させるべく援助をするのである。

1576年、ライデン大学に入学したアルミニウスはその優れた資質の故に学生仲間から一目置かれ、問題があると常に彼に相談するというような状態であったし、また教授達からの評価も高いものであったという。ところで、アルミニウスが学んだライデンの状況についても触れておこう。ライデン大学が設立される前年、1574年に Coolhaes が牧師として招かれたことは注（30）にも触れたとおりである。彼は1566年にディベンター（Deventer）に招かれ、牧師として働いていた。ディベンターは共住生活兄弟団の中心地であり、伝統的に中庸

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

な改革的性格を持った町であった。ルター派、メノナイト派、カルヴァン派それぞれが存在しながら、激しい論争は見られず、画像破壊や極端な反カトリックも存在することなく、カトリックのミサも執り行われているという町であり、彼はそのような宗教的共存をよく理解し、非寛容で平和を乱す熱狂的な人達から教会を守っていたのである。しかし、スペインの北上によって亡命を余儀なくされ暫くドイツに逃れていたのであるが、ライデンの市長の招きにより帰ってきたのである。彼にとってライデンの市長の招きというのは、ディベンターの市長と同様、寛容な性格を持った教会の牧会を想定していたようである。しかし、教会の同僚であったPieter　Cornelisz はカルヴァン派の牧師で、特に教会と政府については彼と異なる見解を持ち、古い北部オランダ生来の改革、聖書的信仰、協調的精神という生温い姿勢に馴染むことは出来なかったのである。後にライデンにやって来たJohannes　Hallius も Cornelisz 同様厳格なカルヴィニストであり、彼らは予定説教義、教会会議の世俗に対する優先、長老監督会の権威、異端に対する非寛容などを主張し、Coolhaes と対立していく。こうして、アルミニウスが学んだライデンは厳しい対立にさらされていたのである(31)。そして、このような対立は本来スペインの圧制とカトリック教会の専一からの開放を求め、自由を希求していた改革的な人々の寛容性にも打撃を与えるものとなり、この問題をめぐってあたかも市民戦争が起りそうな険悪な雰囲気となるという皮肉な結果を生み出していったのである。このころから、オランダ改革教会の寛容性に大きな変化が生じていくようになったといえるであろうし、そのことから「改革」の意味についての歴史的問題が新たに生じることになったということも出来るのである(32)。

しかし、この対立は信仰の内容によるというよりも、むしろ国家と教会の関係をめぐる理解の違いに起因するものであり、あるいは国家内の一致という理解をめぐってその内容が異なることからくる違いともいうことができよう。つまり、国家の優位を主張する自由主義者達は社会的、政治的な問題に一致という考え方を限定し、カルヴァン主義者はそれを教会論的、教義的な厳密な一致を目指していたという違いである。宗教改革を含め、オランダにおける改革の

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

歴史的意味をどのように位置付けるかという視点の違いがこのようなライデンを中心とした各地での対立を生み出していったものということが出来るであろう(33)。

以下、われわれはアルミニウスの神学形成の過程と彼の神学の特質を探り、さらにはドルト会議での問題をも明らかにして、後世への影響関係としてジョン・ウェスレーに至るように論理を構成していくことになるのであるが、最後にこのようなアムステルダム及びオランダの状況の中にアルミニウスを置いてみた場合、彼をどのような視点から見ることがふさわしいのであろうか。Bangsの論文に依拠してアルミニウスの一応の位置付けをしておくことにしよう(34)。

アルミニウスを評価する場合、まずオランダ宗教改革とは何であったかを纏めておく必要がある。第一に、それはスペインからの独立のための闘いという政治的混乱の中で徐々に進められたものであること。したがって、イギリスやジュネーヴにおけるような改革と同一視してはならず、その発生についても資料の散逸などから再現が不可能であるが、国家そのものより先に宗教改革があるということでは、国家を予測させるものであった。第二は、宗教的、神学的ルーツが多様であったことがあげられる。つまり、土着の改革的意志と外国から輸入された改革が渾然一体となっており、その中の一つを取り上げて改革運動の規範とすることは不可能である。例えばハイデルベルク信仰問答の権威をあまりにも強調し過ぎたり、カルヴァン主義で統一的に考察することは不可能である。オランダ宗教改革は極めて特殊なものである。第三に、オランダ宗教改革の担い手を一人の人物に集約することは出来ない。それは様々な人物によるのであり、しかもその人達は政治家であり、教会人であり、神学者でもあるという多面性を持ち、同時に多くの地域においては信徒運動であった。行政が信徒とともに教会改革を作り上げ、外から説教やサクラメント執行のために牧師を招いたのである。その最大の例がアムステルダムであった。アムステルダムでは、改革のリーダーは商人達であり、教会の指導も当初は信徒によって行われていたのである。

このような歴史的文脈の中にアルミニウスを置いた場合に、彼はやはりオラ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ンダの改革的神学者とみなされるべきであると言う肯定的な見解が次のように示される。1．ホラントの古い町、Oudewater生まれで、ユトレヒトのラテン語学校、ライデン大学で教育を受け、その観点は南諸州からの亡命者をある点で邪魔者視するオランダ改革者のものである。2．教育、訓練をプロテスタント、改革教会で受け、オランダ改革教会以外にアイデンティティーは見出せない。3．アムステルダムの政府から庇護を受け、その地で最初のオランダ改革教会の牧師となっている。4．神学教育をカルヴァンの後継者Theodore Bezaのもとで受け、Bezaも彼をアムステルダムに推薦している。5．アムステルダム教会の10人目の牧師として就任しているが、外国人でなくオランダ人としては最初の牧師であった。6．ライデン大学における最初のオランダ人教授となっており、亡命者のカルヴァン派牧師と教会会議で対立した際に、市長達や信徒達が支持したのはアルミニウスであった。7．彼の言葉、神学、教義的理解はジュネーヴで受けたカルヴァン主義のそれであり、オランダ改革教会をルター派、アナバプテスト、自由主義者に対して擁護している。特に、彼はカルヴァンの聖書主義を何よりも大事な神学的原点として理解していた。以上7点を挙げて、Bangsはオランダ改革派神学者としてのアルミニウスの立場を肯定的に示している。その一つ一つの内容については、今後彼の神学的著作の検討を進めていく中で明らかにしていかなければならないが、少なくとも、オランダにおける宗教改革の特殊性との関連の中でアルミニウスを見ていく場合、以上のようなBangsの指摘は、われわれの今後の考察に重要な示唆を与えているものと言えるであろう。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

【注】

（1）オランダのプロテスタント教会は、確かにカルヴァン主義によって支配されていくようになったが、しかしカルヴァン主義が教会政治や教義の側面で大きな影響力を行使するようになっていったのは1550年代以降であるという歴史的事実をも考慮に入れておく必要がある。つまり、オランダ・プロテスタントの歴史はその形成において当初から多様性を持っていたことが考慮されるべきである。
Jonathan I. Israel, *The Dutch Republic; Its Rise, Greatness, and Fall 1477-1806*, Clarendon Press, Oxford: 1955. 特に、5. The Early Dutch Reformation, 1519-1565, pp. 74-105参照。

（2）特に、上にあげたJ. I. Israelやアルミニウス研究の大家であるCarl Bangs等は代表的なものといえる。
J. I. Israel, op. cit., Carl Bangs, *Arminius: A Study in the Dutch Reformation,* Abingdon Press, Nashvill, 1971及び、Arminius as a Reformed Theologian,(ed.) John H. Bratt, *The Heritage of John Calvin,* Michigan: 1973, pp. 209-222。特に後者の論文で、Bangsはアルミニウスの改革的神学への関わりやオランダ改革におけるアルミニウスの位置付けに関して新しい視点と評価をする試みをしている。
また、最新の辞書でドルト会議について、それがオランダ教会会議という性格からはるかに離れたものであり、国際的カルヴァン主義の会議あるいは国際的改革神学会議と言われるべきであるとしながらも、ドルト会議の決定が必ずしも当時の改革的神学と一致してはいないことを述べている。Richard A.Mueller, Arminius and Arminianism,(ed.) Trevor A. Hart, *The Dictionary of Historical Theology,* Michigan: 2000, pp. 33-35.

（3）Jacobus Arminius (1560-1609)、これから、われわれはアルミニウスについて論じていくが、辞書の項目によって一応の概観を掴まえておくことにする。オランダ改革派神学者で、アムステルダムにおける評判高い説教者であった(1588-1603)。また、ライデン大学の神学教師であった時（1603-09)、極端な二重予定説を否定し、キリスト者すべてに与えられる一般贖罪や自由意志を主張する。彼の見解はライデン大学の同僚である神学者Gomarusによって厳しく批判され、論争が展開される。論争はアルミニウスの後継者Episcopiusなどにより展開されるが、ドルトレヒトの教会会議（The Synod of Dort, 1618-19）においてアルミニウス神学は断罪され、論争に終止符が打たれた（*The Mennonite Encyclopedia,* Newton, Kansas, Vol. I., 1955, p. 159.）

（4）Carl Bangs, Arminius and the Reformation, *Church History* Vol. XXX., 1961, pp. 155-170参照。なお、アルミニウスを英雄か異端者かと論じているのはCharles M. Cameronであるが、彼はその論文の中でアルミニウスと後世のアルミニウス主義

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の違いを考察しており、特にカルヴァン主義の重点的な教えであるいわゆるTULIP（Total depravity、全的堕落、Unconditional election、無条件の選び、Limited atonement、限定的な贖い、Irresistible grace、抵抗不可能な恩寵、Perseverance of the saints、聖徒の堅忍）を検証することによってアルミニウスの立場を明らかにしようとしている。この問題については、今後の課題としていずれ論じられることになろう。Charles M. Cameron, Arminius－Hero or Heretic? *The Evangelical Quarterly,* Vol. 64, No. 3 , 1992, p. 213–227参照。

（5）当時司教座の置かれていた町を見ても、現在のオランダについてはユトレヒトだけであり教会管理あるいは行政的にもユトレヒトがいかに重要な位置を占めていたかということが判る。M. ブロール・西村六郎訳『オランダ史』，白水社，1994年（なお、原著はMaurice Braure, *Histoire des Pays-Bas,* 3 d. ed., 1974), p. 15., pp. 29–32、及びJonathan I. Israel, op. cit. pp. 74–75参照。

（6）J. I. Israel, op. cit., p. 114. 彼はこの資料をVan Uytven, Oudheid en middeleeuwen, 23; Van der Woude, Demografische outwikkeling, pp. 134–136その他の資料を元に纏めている。

（7）Bangs, *Arminius: A Study in the Dutch Reformation,* p. 106参照。

（8）カール五世に支配されるようになったいきさつ、及び彼の支配については直接取り上げることをしないが、次の文献を参照のこと。M. ブロール，前掲書、特にその第一章、第二章（8–34頁）参照。また、J. I. Israel, op. cit., p. 29–35（The Early Habsburg Netherlands）にも詳しい論述がなされている。

（9）Carl Bangs, op. cit., p. 87参照。本文で参照されているEvenhuisの文書は、R. D. Evenhuis, *Ook Dat Was Amsterdam,* 2 vols., Amsterdam, 1965, 1967であるが、本論文ではBangsからの引用である。なお、本論文はその構成上このBangsの書物を主な資料として参照している。J. I. Israel, op. cit., pp. 41–54（Humanism and the Origins of the Reformation）は、15世紀からのネーデルランドにおける改革的運動を詳述しており、特にその道徳的、精神的特質を歴史的な諸運動との関連において述べており、その非教義的性質をエラスムス等の聖書的ヒューマニズムと関連付けている。

(10) Groote Geert, Gerardus Magnus（1340–1384），ディベンターで生まれ、パリで教育を受けた後、ケルンやその他の所で教えるが、1374年その生活を単純なものとして送る決心をした。ベルギーの神秘思想家Jan van Ruysbroeck（1293–1381）の教えに従い、ユトレヒト管区の宣教説教者となるが（1379)、司祭としての叙階は受けなかった。生まれ故郷のディベンターにおいて、数人の友人と共に修道院のような生活を送り、それが共同生活兄弟団の核となり、後同様な趣旨で女子のためのコミュニティーをも作ることになった。これは、当時のいわば信徒による一種

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の改革である。

本文のような主張については、M. ブロールも16世紀ネーデルランドの性格を規定するものとして、それ以前の運動、フローテの共同生活兄弟団、エラスムス、アグリコラなどに言及している。M. ブロール，前掲書，24-26頁参照。また、注(8)との関連をも参照のこと。その他に筆者はこのようなネーデルランドの霊性あるいは精神的特質を考える際に、ベルギーにその端を発しネーデルランド全土に広がりを見せていったベギン会の活動も一つの証左になるのではないかという仮説を持っている。

(11) Bangs, op. cit., p. 88.

(12) アムステルダム、オランダにおける初期宗教改革の多様性については多くの学者が同様の見解を示しており、その歴史的経緯の複雑さと神学的傾向の変遷については一考を要する。注（1）の J. I. Israel の論文及び Carl Bang, Arminius as a Reformed Theologian, (ed.) John H. Bratt, *The Heritage of John Calvin,* Michigan: 1977, p. 209-222参照。また、J. L. Adams はこの問題を社会構造との関係から明らかにする試みをなしており、幅広い視野を与えてくれる。James Luther Adams, Arminius and the Structure of Society, (ed.) Gerald O.MucCulloh, *Man's Faith and Freedom:The Theological Influence of Jacobus Arminius,* Abingdon Press, New York: 1962, pp. 88－112.

(13) メノナイト派とアナバプテストの関係、Menno Simons について、またメノナイトのオランダにおける展開の経過等については J. I. Israel, 前掲書，86-95頁参照。

(14) 従来の研究に対して、その欠点を補うためにはこのような初期アムステルダム教会の特質を明らかにすることが不可欠であり、ドルト会議以前の改革教会とは何であったのかを理解する鍵にもなるものである。したがって、最近の研究では多くの学者が同様な指摘をすることになったのである。その意味で、筆者が参考にした文献はほとんどこの線に即して論述されている。

(15) Bangs は、この場合のプロテスタントをどのように規定すればよいかと問題を提起している。Evenhuis はこのグループがオランダの改革教会の性格を決定したのであるからそれを「改革派」(Gereformeerden) と呼んでいるが、その内容はオランダ語にしてもあいまいなものであると言う。ルター派に対抗してツヴィングリ派、カルヴァン派という特別な内包はあるとしながらも、それをアムステルダムの地方的特質と見ているのである。Bang, op. cit., p. 93参照。

(16) 教派性の問題については、アムステルダムではほとんど問題になっておらず、その意味でプロテスタントは流動的であったといえる。精神的風潮としての非教義的改革が望まれていたことはアムステルダム改革の特徴として指摘される所である。J. I. Israel, op. cit. pp. 84-85参照。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

(17) 南部の改革派グループは、ローマ・カトリック、ルター派の両方との激しい戦いを通過しており北ネーデルランドより厳しいカルヴァン派であった。Casper van der Heyden（1530–1586）は、ベルギーのメヘレムに生まれ家族の反対をおしてプロテスタントに改宗した。ミッデルブルクとアントワープで説教者として奉仕し、カトリック、ルター派、メノナイトに対して激しいカルヴァン派教義の擁護者として働いた人物である。

(18) アムステルダム教会のこのような特質は、アムステルダムに限らず、オランダ特に北部オランダの特質でもあるといえる。そのような教会の特質を歴史的に明らかにしようとして、キリスト教ヒューマニズムとの関係を論じているのは J. I. Israel である。彼は、このような性格をフローテに始まる Devotio Moderna 運動とその影響下にあったアグリコラやエラスムスの *Philosophia Christi* との関係で見ようとしている。それが、オランダの教会に一つの性格を与え、17，18世紀の改革教会にさえも影響を与えているものであろうと論じている。Jonathan I. Israel, op. cit., pp. 41–54，特に p. 42参照。

(19) Emden は、オランダの北の端、東フリースランドに位置する小さな港町であったが、16世紀初頭に宗教改革を受け容れプロテスタントの支配する所となった。南ネーデルランドでプロテスタントに圧迫が加えられるようになると、多くの人たちはエムデンに逃げてくるようになり、この地が後のオランダ改革派教会にとって揺籃の地となっていった。（参考：ed. Hans J. Hillerbrand, *The Oxford Encyclopedia of the Reformation*, Oxford Univ. Press, Vol. 2 , 1996, pp. 39–40）また、アムステルダムからの逃亡者たちはエムデンのみならずロッテルダムにも少数が逃亡していたことが、アルミニウスの死後、彼の死を悼んでなされた Peter Bertius の演説からも明らかにされている。*The Works of Arminius,* The London Edition, Tr. by James Nichols and William Nichols, 1825–1875, Rep. In1996, Baker Book House, Michigan: Vol. I., p. 20及び注参照、以下 The Works と略記。この全集は1619年のラテン語版全集によっており、ラテン語原典には見られない詳細な注記が施されたものである。ラテン語版は次のものを参照。*Arminii Opera Theologica,* Lugduni Batavorum, Apud Godefridum Basson, 1629以下 Opera と略記。なお、原典ではこの追悼演説の部分にはページが示されておらず、目次のすぐ次に掲載されている Petri Bertii de Vita et Obitu Reverendi et Clarissimi Viri D. Iacobi Arminii Oratio である。

(20) Bangs, op. cit., p. 99.

(21) このカテキズムについては、次の論文に全文が掲載されているので参照のこと。Joh. C. Breen, De “Kinderlere” van Laurens Jacobszoon Reael, *Nederlandsch Archief voor Kerkgeschiedenis,* VI, 1897, pp. 129–57. 全体が124項目の質問 Vraege と回答 Ant-

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

woordeからなっており、後のアルミニウスの思想にも通じるものがある。古いオランダ語で書かれているが、例えば第一問はWat sijt ghij？(あなたは何ですか)と問うている。その答えは次のとおりである。Ic ben een redelic mensche gheschaepen van Godt na sijnnen eevenbeelt, rechtvaerdich ende heyllich. つまり、「私は、義と聖という姿に似せて神によって創られた理性的な人間です」と、人間は神の似像としての理性redelic（現代語はredelijk）を持った存在として規定されている。また第七問は、罪の悲惨からどうして救われるかとの問いであるが、そこでは神の子であるキリストを信ずる信仰を持つ者が救われると、予定説を否定するような信仰内容が示されている。もちろん、この頃予定説が問題にされていたわけではないが、後のアムステルダムやオランダの教会で論じられることになる予定説について、既に論争の萌芽があったという証左といえるであろう。Bangsはこのようなことから、Reaelをアルミニウス以前のアルミニウス主義者の一人と規定し、そのような人達が形成期のオランダ教会で重要な指導性を発揮したのだという(Bangs, op. cit., p. 104.)。J. I. Israel, op. cit., p. 164も参照のこと。

(22) アルヴァ侯の過酷な支配の下で追放された船乗り達。彼らは命を賭けて海賊となり、ネーデルランドとの交通を遮断し、またオラニエ公と連絡を取りつつ時の満ちるのを待っていた。オラニエ公は彼らに私掠許可状をも出していたという。M. ブロール, 前掲書, p. 42参照。

(23) このアルヴァ侯に対する抵抗を醸成したのは、彼が戦費を賄うために課した十分の一税がその原因となっており、ここに商業とプロテスタンティズムが同盟し全精力をあげてアルヴァに抵抗したとし、「同時にカルヴィニズムの呼びかけはインフレーションと課税とによって手痛い打撃を受け、不満を持っていた階層、下級貴族と郷紳層の間に広く浸透する兆候を見せた」と書いているのはC. ウィルスンである。C. ウィルスン・堀越孝一訳『オランダ共和国』, 平凡社, 1971（原文はC.Wilson, *The Dutch Republic,* London: 1968）28頁参照。

(24) Petrus Plancius（1552–1622)、オランダの地理学者、地図製作者、カルヴァン派牧師として有名であり、アルミニウスとレモンストラントの強力な敵対者であった。イギリス、ドイツで教育を受けた後南ネーデルランドで、1576年に改革派の牧師としての活動を始め、1585年ブリュッセルにスペイン軍が押し寄せてくることにより、北のアムステルダムに亡命。南への帰還を望みながら、40年近くをアムステルダムの改革教会に奉仕する。神学的には厳格なカルヴァン派であるが、同時に地図製作者としての実績から、東印度会社の設立にも重要な役割を果たした。

(25) Erastianism、宗教は国家に従属すべきであるとする主張。スイス、バーデン生まれの医師、神学者であったThomas Erastus（1524–83）の説により、この名がつけられる。彼はカルヴァン派がプファルツァ公国で自分たちの主張を強く表明しよ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

うとしたことに対して、反論を書き、その中で国家が宗教、政治問題についての責任と権限をもっていること、教会はその権限に従うべきことを主張している。ここに至ってカルヴァン主義者と為政者との見解の違いが明確になり、実質的に国家教会としての性格を採り始めたオランダ改革派教会の中に分裂が生じているのである。教会問題について三つの立場があったと指摘しているのはIsraelである。彼の分析では、教会の優位を主張するカルヴァン主義、エラストゥス主義を採る反カルヴァン派、それにハーレムやライデンを中心とした中庸派が挙げられるとしている。J. I. Israel, op. cip., p. 367-71参照。

(26) 公的な問題について、Bangsが取り上げている事例を簡単に紹介しておく。それはカトリック教会のミサでオルガンを弾いていたJan Pietersz Sweelinckは、市の財政でヴェニスにオルガンの勉強に行くが、帰ってみるとミサもなく、オルガンの必要もなくなっていたが、市政府は彼がカトリックであることを知りつつその死に至るまで彼を市政府で雇い給与を支払っていた。しかも、彼は教会の公的礼拝での仕事がなくなった後も、ミサ曲の作曲を続けていたが、音楽活動としてミサ曲を発表する場は無く、日曜の午後にコンサートを開いていた。当局の主だった人たちはこれを楽しみにし、旧教会の前はこの人々のコンサートに行くまでのプロムナードとして親しまれるようになったという。このように、市当局の寛容の下にいわゆる隠れカトリックがいたという事実は、アムステルダムの政府と教会の関係を考える時に参考になる事例である。Bangs, op. cit., p. 109.

(27) Bangs, op. cit., p. 120.

(28) 注（12）のJames Luhter Adamsの論文，93-95頁参照。Adamsはこの論文の中で、アルミニウスの姿勢を道徳的感覚と社会秩序への要求からくるものとし、彼は、それ故にキリスト教徒の自由の行使においては真剣で誠実であれば相違が存在するのは当然であって、それを強制で取り去ることは出来ないしすべきことではないと、違いを容認する立場を示している。

(29) Opera冒頭に掲載されたBertiusの演説参照。特に、英訳The Worksの13-47頁の本文及び脚注をも参考にして記述する。

(30) この大学はライデンの住民が示した勇気への報いとして、オラニエ公ウィイレムにより1575年２月６日に設立された。この町は前年、スペイン軍の包囲に対して折り良くホラントに到着したゼーラントの船乗達と共に抵抗した。彼らはその帽子に銀の三日月を飾り、「教皇主義者よりもむしろトルコ人を」という言葉を掲げていた。この大学での最初の神学講義はJasper Koolhaes（1534-1615）によってなされた。彼はコブレンツのカルトゥジオ会修道院で修道士であったが、後福音主義に変わり各地で説教者として働いていたが、1574年スペインの包囲から町が開放されて直ぐ後でこの町の牧師となった。後に聖職者任免件の問題について、世

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

俗権の立場を擁護しそのため1582年、ハーレムの地方教会会議で破門された。また、予定説を否定し実際的な信仰を強調して寛容のために戦っている。そのため、アルミニウスの先駆者とも考えられている（R. G. G. 参照)。また、最初の神学教授 William Feugueraeus が到着するまで講義もしていた。Feugueraeus は寛大な人柄であり、1570年にオラニエ公に捧げたトラクトは宗教的寛容が薦められており、「宗教の問題については、人を惹きつけることはあっても、強制されてはならない」と主張している。このように、ライデン大学の最初は寛容な精神によって始まったということを強調している。Adams は Coolhaes がルター派、アナバプテスト、また Beza の弟子達のためにも寛容な態度を示すことで当局者達から保護されていたことを上げ、アルミニウスも当局が支配力を持っていなかったならライデンに招かれることは無かったかもしれないとして、信仰上の多様性を守るためには当局者を当てにしていたと述べている。James Luther Adams, 前掲論文, 98頁参照。

(31) 一時的には表面的和解がなされるが、Coolhaes は1581年にミッデルブルクの国家教会会議でその見解を攻撃され、さらには1582年ハーレムの教会会議で牧師職を剥奪されて、破門になっている。ライデン市長は彼に年金を与えるが、17人の子供を養育するため醸造業に転じている。このように、状況は徐々にカルヴァン派の強力な支配の下に置かれるようになっていったのである。J. I. Israel はこのような状況の変化を当時の重要な指導者達の例をあげて論証している。Caspar Coolhaes, Herman Herbertsz, Hubert Duifhuis 等であるが、特に Coolhaes については、彼が予定説を含むカルヴァン派教義に対して躊躇し、むしろアナバプテストやルター派との親しい対話を進めていたことや教条主義的神学を拒否し、寛容を擁護していた Koornhert との親交が改革者たちの目に留まっていたことが排除の原因であったとしている。J. I. Israel, op. cit., p. 370–371参照。

(32) Christine Kooi はこのような視点からライデンにおける改革運動の歴史的展開を再検討し、特に宗教的自由と寛容という視点から論じている。Christine Kooi, *Liberty and Rligion: Church and State in Leiden's Reformation, 1572–1620*, Brill, Leiden, 2000.

(33) Christine Kooi, 前掲書参照。本書において Kooi は初期の改革を望んだ人々の教会観と後に南から亡命してきたカルヴァン主義者の違いを、ライデンの状況を中心に論述し、カルヴァン主義者に対抗した人々の望んだのは包括的教会であって、教会理解の問題で対立することを好まなかったことを論じている。

(34) Carl Bangs, Arminius as a Reformed Theologian 参照。

NII-Electronic Library Service